

分断と排除の *Harry Potter* -Voldemort はなぜ悪なのか-

Separation and Exclusion in *Harry Potter* Series:
Why Is Voldemort Evil?

鈴木 宏枝

はじめに

J. K. Rowling (1965-) の *Harry Potter* シリーズは、I : *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (1997)、II : *Harry Potter and the Chamber of Secrets* (1998)、III : *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* (1999)、IV : *Harry Potter and the Goblet of Fire* (2000)、V : *Harry Potter and the Order of Phoenix* (2003)、VI : *Harry Potter and the Half-Blood Prince* (2005)、VII : *Harry Potter and the Deathly Hallows* (2007) の7巻で構成され、映画化やテーマパーク、スピンオフでも世界的な人気を博してきたベストセラーのファンタジーである。

シリーズは、両親を亡くし、伯父の Dursley 家で抑圧されながら暮らす11歳の少年 Harry Potter のところにホグワーツ魔法学校 (Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry、以下ホグワーツ) からの入学許可書が届き、自分が有名な魔法使いだと知る場面から始まる。グリフィンボール寮 (Gryffindor House) で寄宿生活を送り、校長の Albus Dumbledore をはじめとする多くの先生に出会い、Ron Weasley や Hermione Granger ら

の親友を得、人気スポーツのクイディッチに夢中になる。並行して、魔法界で恐れられている 闇の魔法使いの Lord Voldemort と自分との宿命的な関係を理解し、戦いを挑んでいく。Voldemort はかつてホグワーツの優秀な生徒だった Tom Marvolo Riddle の別名で、禁忌である闇の魔法に魅入られたのちに元の名前をアナグラムにして改名した。純血主義を標榜する崇拝者集団のデス・イーターズ (the Death Eaters) を操り、マグル (魔力を持たない人間) との混血の魔法使いの粛清と世界制圧をもくろんでいる。物語の前半の Voldemort は Harry の両親を攻撃したときに跳ね返された死の呪文のために肉体を失っているが、IVでは Harry の血を媒介に復活する。Harry は危険に身をさらしながらも、レジスタンスの大人たちや学校の友人とともに立ち向かい、ホグワーツを最終決戦の場として勝利する。

主人公を亡き者にしようとする Voldemort は、残酷で悪辣な敵対者として登場する。だが、Iでホグワーツ教員の Quirrell が若き日に Voldemort に出会い、“There is no good and evil, there is only power, and those too weak to seek it (善と悪があるのではない。力しかない。そして、力を求めるには弱すぎる者が¹⁾” (I 313) という考えを持つようになったように、生きていた間の Voldemort は力と不死と自己肯定を目指したに過ぎない。彼を「悪」と規定するのはあくまで Harry の側であり、Bell が言うように

Voldemort is a wholly a creation of environmental circumstance; he is the logical conclusion of the Wizarding world itself. The systematic Othering of Tom Riddle, wherein he is continually pushed to a weaponed society's margins from the moment of his birth, provides a fertile environment of moral disengagement.

ヴォルデモートは、完全に、彼を取り巻く境遇から作り出されたものであり、魔法界そのものが論理的に出した結論である。トム・リドルは組織的に「他者化」され、その内部で誕生時からずっと武装社会の周縁に

1 本文中の邦訳はすべて筆者による。

押しやられる。それにより、道徳的自由が豊かな環境がととのう。

(44)

デス・イーターズを従え、死の呪文や拷問の呪文をためらいもなく用いる Voldemort だが、彼への信奉者がいて勢力が拮抗している段階においては、善悪の決着はまだついていない。彼らが「悪」となり、周縁の者となるのは、戦いが終了したのちの視点に拠る。

本論では、まず、Voldemort が物語の中で記述される客体として固定化される点を語りの構造から考える。次に、Rowling の執筆時期に着目して、二項対立的な内戦において勝利した Harry らが Voldemort をさかのぼって「悪」と規定することで彼らの救済を避け、分断を推進・固定した可能性を考察する。

I 語りにおける客体化

Harry Potter は、Dumbledore が自分の死も織り込み済みで Tom/Voldemort の後始末をするために Harry という武器を育てる物語でもある。Dumbledore は Harry にとって “the gentle avuncular adult who makes Harry, at least, feel safe, protected, and relatively sure of his success (ハリーが少なくとも自分は安全で守られていて、どちらかといえばうまくやれると感じられるようにできる、叔父のような大人)” (Garner 368) であるが、Harry が生まれる前のドラマが明らかになるにつれ、Harry ではなく Dumbledore に軸足が移り、二者が合同して勝利者の語りを形成していくようにも見えてくる。

VIIでは、青年時代の Dumbledore が、レイプを思わせる深刻な被害を受けた妹の Ariana をめぐり葛藤を抱えていたことが分かる。家族の不和の中、闇の魔法も教えるダルムストラング学校 (Durmstrang Institute) 出身の若い魔法使い Gellert Grindelwald に出会った Dumbledore は、魔法使いの自由を目指す革命思想に共感する。だが、2人は方向性をめぐって

争いになり、巻き添えとなった Ariana が事故死したことで決裂する。逃亡した Grindelwald はさらに闇の魔法の世界に入り込むが、袂を分かった Dumbledore によって 1945 年に決闘で打ち負かされ、刑務所のアズカバン (Azkaban) に収容される。Tom Riddle が同じ闇の魔法に興味を持ち始めるのは Grindelwald の暗躍期と重なり、復活後の Voldemort は秘宝の 1 つであるニフトコの杖 (the Elder Wand) のありかを聞き出すためにアズカバンに侵入し、杖が Dumbledore と共に埋葬されていることを聞き出したのち、Grindelwald を殺害する。Hermione が闇の魔法について

Maybe he [Dumbledore] did believe these things when he was seventeen, but the whole of the rest of his life was devoted to fighting the Dark Arts! Dumbledore was the one who stopped Grindelwald, the one who always voted for Muggle protection and Muggle-born rights, who fought You-Know-Who from the start and who died trying to bring him down!

たぶん、ダンブルドアは 17 歳のときにはこういうものをきっと信じていたけれど、それ以降の人生全部を闇の魔法との戦いに捧げてきたんだわ。ダンブルドアはグリーンデルヴァルドを止めた人だし、マグルの保護やマグル生まれの権利にいつも賛成してきたし、最初から「例の人」と戦い、倒そうとして死んだのよ。

(VII 295)

とまとめるように、学校長として登場する以前から Dumbledore の物語は始まっていた。

一教師だった Dumbledore は、かつて Tom をホグワーツに迎えて監視下におくが、闇の魔法への傾倒を止めることはできなかった。最初の戦争ではその肉体を滅ぼしたものの、危機は残っていることを理解し、“the boy who lived (生きのびた子)” (I 18) である Harry を育て、最終決戦への道筋をつける。Grindelwald との関係の中で足を踏み入れかけた闇の魔法

への警戒と、同じくそこに引きつけられた生徒 Tom の変容に決着をつけるための Dumbledore の内省的な戦いが、時を経て Harry に実践的に託されるのである。こうした背景が Harry に語られないために、Harry は Dumbledore の真意をはかりかねて何度も悩むが、真実を伝えるタイミングも含め、Dumbledore は、自分がトリガーとなった Voldemort 誕生に責任を負おうとしているように見える。Harry は、言葉ではなく Dumbledore の人格そのものに信頼を寄せ、結果的に師の期待以上に見事に任務を遂行する。

VIIの結末部分では、hogwartsの戦いを生き延びた生徒たちの19年後の姿が描かれる。結婚した Harry と Ginevra、Ron と Hermione、同じく家庭をもった Draco たちが子どもを見送りにキングス・クロス駅の93/4番線に集まっている。シリーズがこの時点からの回顧であるならば、滅ぼされたところから Voldemort は宿命的に「悪」としての像を結ぶことになるだろう。

歴史的出来事は、この『人間的コンテクスト』の中で生成し、増殖し、変容し、さらには忘却されもする。端的に言えば『過去は変化する』のであり、逆説的な響きを弱めれば、過去の出来事は新たな『物語行為』に応じて修正され、再編成される

(野家 11)

ように、*Harry Potter* は、勝利のコンテクストから Harry のhogwarts時代を再構成し、そのプロセスにおいて敗北者 Voldemort が「悪」となる。

これを強化するかのように、偽 - 一人称²で語られる Voldemort らの情

2 *Harry Potter* の語り手は “an outside storyteller [that is, not a character within the story] whose viewpoint is limited to that of a single character (ストーリーの中にいる登場人物ではなく外部の語り手で、視点は登場人物1人に限られる)” (Russell 180) ところの “the limited narrator (限定的な語り手)” (180) である。“[Rowling] had to bend over backwards to filter everything the reader needed to know about that world through Harry’s view. If Harry can’t see it? It doesn’t happen for the reader (ローリングはハリーの視点からの世界について

報は、伝聞や推量、Dumbledore の認知的バイアスのかかった記憶保管器のペンシーブ (Pensieve) によるのぞき見で形作られる。Voldemort の胸中や行動の背景はほぼ Dumbledore の類推であり、デス・イーターズの卑怯ぶりは、Harry の名付け親の Sirius Black の苦々しい回想の中で語られる。隷属的な集団性はないので厳密にはサバルタン³とは言えないが、第三者を経由してのみ情報が伝えられる点では、サバルタンと同様に「無言でありつつけている」(スピヴァク 74) といえるだろう。

暴力的な儀式やヘビのアイコンは、悪役としての不気味さを増大させる。死の呪文を用いて相手を冷酷に殺し、ほくそえむさまは狂気に似つかわしい。だが、その禍々しさを描写するのはあくまで Dumbledore と Harry の目と耳と手である。闇の魔法をめぐる内戦において 彼我は勝者によって分断され、外見の邪悪さが再記述されるのである。

Tom は、不死になるために殺人を犯し、自分の魂の欠片を封印容器のホークラックス (horcrux) に保存している。Dumbledore はその過程で Tom の顔や身体が崩れていったと述べ、復活時の Voldemort は

[w]hiter than a skull, with wide, livid scarlet eyes and a nose that was flat as a snake's with slits for nostrils..., ...His hands were like large, pale spiders; his long white fingers caressed his own chest, his arms, his face; the red eyes, whose pupils were slits, like a cat's, gleamed still more brightly through the darkness.

骸骨のように白く、見開かれた目は鈍赤、筋のような鼻孔の鼻は蛇のように平らだった (中略) 彼の手は大きく青白いクモのようで、長い白い指が自らの胸や腕や顔を撫でていた。血走った瞳は猫のような切れ目で、

て読者が知る必要があるすべてのことをさらうためにさかのぼっていかなくてはならなかった。もしハリーに見えなかったら？読者にとっても起きていないことになる)” (Bransford) とも指摘される。

3 魔法使いたちの周辺にいるゴブリンや家付き妖精などの種族については、Brown が「サバルタン」として論じている。

暗闇の中でなおもぼんやり光っていた。

(IV 558-59)

という不気味な外見である。この異形性は、Voldemortにとって、憎むべき父親の Tom Riddle に似た端正な顔立ちを壊していく作業でもあり、必死の事情だったかもしれない。だが、Dumbledore の価値観では、禁忌の魔法に手を染めた罰としての「醜さ」であり、歪み=悪と見なされる。

デス・イーターズの猛者である Bellatrix Lestrange も魂が Voldemort に奪われていくにつれて美貌が損なわれ “a tall *dark* woman with heavy-lidded eyes (まぶたが半ば閉じた、背の高い、顔色が黒ずんだ女性)” (V 106 強調引用者) となる。同じ家付き妖精 (house-elf) であっても、Harry に忠実で親切な Dobby に対し、Malfoy 家から Harry に使用権利が移った Kreacher は “tears poured over his *snout* and into his mouth full of *greying* teeth (突き出た鼻から、汚れた歯ばかりの口の中へ、涙が流れた)” (VII 159 強調引用者) と汚さが強調される。昔話の美学的法則が影響しているとはいえ、自他を分かちアイコンとして、作中では主観的な身体的美醜が無批判に用いられ、身体の欠損や通常の状態からの乖離が精神の墮落につながる。邪悪さと身体のハンディキャップを結び付ける安易さへの批判はなく、見た目の逸脱が魂の汚れと同意になる。

Voldemort を「悪」と規定するのは疑似 - 歴史家の視点であり、19 年後からの語り直しにおいて敗北者の Voldemort とその一味は醜いマスクをかぶせられ、剥ぐことを許されない。

II 愛という資産

Harry Potter において、闇の魔法に傾倒するか否か - 善になるか悪になるか - の分断基準はどこにあるのだろうか。作品の書かれた 1997 年から 2007 年という時代に注目すると、イギリスを含む西欧社会で肥大化しつ

つあったサッチャーリズムの影響として、伝統回帰⁴や新自由主義を読み取ることができ、作品は、後天的に技術を伸ばせる魔術だけでなく、あらかじめ与えられている肉親からの愛を強力な武器として使えるか否かの戦いの様相を帯びる。

新自由主義は、「個人は自らの力と選択のみを頼りに生きるべし。しかしその際に取りべき選択肢が与えられているかどうかとも、個人の責任である。そして現実には、まともな選択肢が与えられることはほとんどない」(大貫他 10)といわれるように、グローバル化した資本主義世界で生き残るための市場原理主義の経済学説であり、当時、規制緩和や民営化、市場の自由化を推進した。

新自由主義政策下での Rowling は生活保護受給者のシングルマザーだった。その空想の行先である *Harry Potter* では、社会批判ではなく規制無視のゼロサムゲームの中での勝利が夢見られている。後ろ盾と遺産と実力を兼ね備えた Harry は、魔法省の規制やルールをものともせず、自由に我が道を行き、結果的に名声も冒険も家族も手に入れる。河野は、*Harry Potter* では「魔法省奥深くまで巣くった悪と戦うにあたって、学校で学ぶ呪文＝ラテン語の知識は基本的には役に立たない。ハリーたちは学校では教えてくれない問題解決力を発揮することが求められ」(6)、新自由主義の特徴である「反官僚主義、反学校、反教養主義」(6)が見られることを指摘している。

魔法省の規制外の戦闘の中で Harry の財産となるのは、旧来的な親

4 *Harry Potter* は制度から暮らしの細部に至るまで、イギリスらしさに満ちている。安藤は生活様式や風土、イギリスのファンタジー文学の定型など「英国的な特質が濃厚に書き込まれ」(124)、そのローカリティゆえに普遍性が生まれていることを指摘している。また、この時代の文学に見られるイングリッシュネスについては、「国家、家庭、義務、権威、伝統など伝統的トーリズムの用語が、知的で先鋭な新保守主義思想の理論とともに新たに蘇」(215)った例として、曾村が *The Remain of the Day* (1989) を挙げている。コンパートメントの特別列車でパブリック・スクールに向かい、寮生活の中でスクールごとに競い合い、ヴィクトリア朝時代のままの大食堂でイギリスらしいごちそうを食べる *Harry Potter* で前景化される英国らしさは、その本物らしさゆえに逆に疑似的な色合いを帯びつつも、Rowling の欲望解放であるかのように、特権階級の暮らしへの憧れをなぞるものでもあるように見受けられる。

の「愛」であり、さらに、それが血縁関係から生まれる無私のものでなければならぬと定義されることで価値が上がる。Harry を最強の魔法使いにするのは James と Lily 夫婦の遺産としての守りの力である。2 人は互いに愛情と尊敬を持った申し分のないカップルで、Harry に惜しみない愛情を注ぎ、死後も守護霊として共同する。Voldemort から襲撃されたときには Lily の防御の魔法が息子を死から救い、エクスペクト・パトローナムの呪文では、牡鹿の形をした James が現れる。Lily のことを子どもの頃から思慕していた Severus Snape が二重スパイとして任務をまっとうした上で Harry を守りきって死ぬことも、Lily からの守護の延長ととらえられるかもしれない。Sirius は 2 人の学校時代からの親友であり、文字通り命がけて Harry を守って、従妹に殺される。Voldemort が嘲る “your [Dumbledore’s] famous pronouncements that love is more powerful than my kind of magic (愛は、俺の使うたぐいの魔法よりも強いというお前の有名な声明)” (VI 415) という素朴で抽象的な概念には、きわめて具体的で限定的な具象性が与えられているといえるだろう。

Harry の親友の Weasley 家の人たちは、誰に対しても分け隔てなく、気さくで愛情に満ちている。父親の Arthur と母親の Molly の家庭はつましくも温かく、Harry を招き入れ、真剣に心配する。デス・イーターズの最強の魔女の Bellatrix を倒すのは、娘の Ginevra を殺されそうになって激高した Molly である。魔力の点では Bellatrix の方がはるかに強いが、それゆえの油断と、娘を守ろうとする母親の「愛」の力そのものの力が勝る。Rowling は二者について、“two completely different characters, who each show a very feminine side of love. The pure and protecting love of Molly, and the obsessive, perverse of Bellatrix (2 人の完全に異なる登場人物で、それぞれが愛におけるきわめて女性的な面を表している。モリーは純粋で保護的な愛、ベラトリクスは執念深く正道を踏み外した愛を)” (Sue TLC) とインタビューに答えているが、Voldemort に隷属せざるを得ない悪女に対し、母なる愛を示す聖女が勝つのはこのコンテキストにおいては当然だろう。

Bellatrix の姉で Black 家の長女の Narcissa Malfoy も興味深い。Narcissa と Lucius が結婚して生まれた Draco は、年齢が上がるとデス・イーターズに加入させられて深刻な殺人に近づいていく。Narcissa は Severus と血の誓いを結ぶことで Draco を守り、息子が殺人を犯さないように手を回す。Severus が Narcissa との約束を守ることで、Dumbledore は望み通りに Severus に殺されることができるとする。結果的に、母親としての Narcissa のふるまいが Dumbledore に与することになる。また、ホグワーツの戦いで Harry の死を確かめに行った Narcissa は Draco が生きていることを密かに Harry から聞き、学内に侵入して息子を探すために、Harry が死んだという偽の情報を Voldemort に伝える。母親としての「愛」が最終的に Harry の勝利に貢献する。

Ⅲ 愛の欠落と敗北

他方で、ペンシーブからの情報と Dumbledore の推測によると、孤児院育ちの Tom は自分の特殊能力に早くから気づき、悪質な事件を起こすので周囲に疎まれている。その力の強さを知った Dumbledore は彼をあえてホグワーツに入学させて管理下におくが、結局、Tom は在学中に闇の魔法への興味を示し始め、禁忌のホークラックスへのヒントも得る。

さらに、Tom は自分の母親が Salazar Slytherin の直系の子孫 Merope Gaunt であるのに父親は平凡なマグルであることを知る。Gaunt 家は他の血筋が混じるのを嫌い、親族間での結婚を繰り返してきた家系で、Merope は最後の 3 人となった家族のうちの一人である。Merope は父親の Marvolo と兄の Morfin と一緒に暮らし、Slytherin 家の末裔であるにもかかわらず強い魔法を使うことができないため“dirty Squibs (汚れたスクイブ)” (VI 195) という蔑み言葉で罵られ、“she wished for nothing more than to sink into the stone and vanish (床石の中に沈んで消えてしまいたいという以上の願いはない)” (VI 195) という怯えた状態である。近親相姦は示唆されていないが、虐待を受け、家族が純血にこだわっている点からも、

性的に搾取された可能性が示唆されるだろう。血と女性性の双方において、Merope がマグルの Tom に恋したことは父と兄の怒りを引き起こす。彼らは魔法で Tom に復讐したためにアズカバン送りになるが、刑期を終えて戻ってみると Merope は魔法の恋の薬で Tom を誘惑し、駆け落ちしていた。だが、魔法が解けたとき Tom は妊娠中の Merope を捨てて故郷に戻ったため、失意の Merope は孤児院で孤独に男の子を産み、Tom Marvolo Riddle, Junior と名付けるよう遺言して死ぬ。その出自も、母親を捨てた Tom の名前も顔立ちも、Voldemort には我慢のならないものである。近親婚を繰り返して純血を保ってきた Gaunt 家と Merope の運命、また、Tom からの歓心を得ようとして魔法薬を用いたことは一種のレイプ (McNulty) かもしれず、産み落とされた Tom には誰も愛情を注がない。

周囲は奇妙な出来事を引き起こす少年 Tom を敬遠し、Tom はますます疎外感を深める。ホグワーツ入学後は、自分の中に流れるマグルの血を呪い、闇の魔法にさらに引きつけられ、自分の力の源である魔法使いの血に執着していき、結果としてマグルや (自分も混血であるにもかかわらず) 混血への憎悪を深める。マグルにすぎない父親が名家に生まれた魔女の母親を捨てたことに対しては特に怒りが激しく、名前を変えたのち、在学中の 16 歳でためらうことなく父親、祖父、父親の妻を殺害する。

Voldemort を信奉するデス・イーターズの多くのメンバーも、愛のない家庭に生まれることで心身が歪む。Voldemort に付き従う Bartimaeus Crouch, Junior (以下 Junior) は、Voldemort と自分が似ていることを自覚し、“Both of us, for instance, had very disappointing fathers ... very disappointing indeed. (たとえば、私たちは 2 人ともとても残念な父親を持っている ... 本当に残念な)” (IV 589) と述べる。Voldemort の父が妊娠中の Merope を捨てたのと同様に、Junior の父 Senior も英国魔法省 (British Ministry of Magic) の仕事に没我し、息子への愛を持たない。Junior を悪の道に進んだのは父への怨嗟であるという説明があり、結果的に 10 代のとき、Junior はデス・イーターズによる殺戮現場にいたことで逮捕され、裁判の場で父親の命によりアズカバン送りにされてます

まず恨みを募らせる。母親は Junior の味方だったが、Senior に対しては何も言えず、夫婦関係は破綻している。母親は変身薬を用いて Junior と入れ替わり、息子の代わりに息子の姿のまま獄死する。家に戻った Junior は自宅で Senior に監禁されていたところを Voldemort に解放され、Voldemort を助けるために hogwarts の教員になりすまして学校に侵入する。それを警告に来た Senior は Junior によって殺され、Junior は三校魔法大会 (Triwizard Tournament) の優勝杯を操作して、復活を待つ Voldemort のもとに Harry を送ることに成功する。

Junior がデス・イーターズとして Voldemort と共鳴するのは、父親に愛されず、母親が見捨てられ、夫婦の関係が著しく不均衡で、与えられるべき愛情が与えられていなかったという点である。歪んだ支配欲が父 - 息子関係のアンバランスから生じたものであることは、Harry が飛ばされた対決場所が Voldemort の実の父の墓場であることから分かる。Voldemort の復活に父親の骨が必要であるという以上に、それを死者の眼前でおこなうことに儀式性が与えられ、愛のない家庭や家族を顧みない父親の愛情不足が悪魔のような子どもたちを生んだという主張が再強化される。自立的な解放の可能性を与えられない点では、亡霊を乗り越えようとする息子たちの復讐そのものすら親に縛られていることの証かもしれない。親の行動とその血で子どもの人生が左右されるという価値観の中で、虐待された息子たちは自分の人生を歩くことを阻まれ、若者としての主体性もないままに、憎悪と復讐の道に落ちるしかない。

Bellatrix は かつて Junior とともに Longbottom 夫妻の拷問に加わった魔女である。彼女は、マグルと駆け落ちした妹の Andromeda を憎み、姪にあたる Nymphadora Tonks や純血主義を嫌う従弟の Sirius も殺害する。だが、その邪悪さは彼女の後天的な資質でもなければ、マグルを憎む個人的事情や事件があったわけでもない。“The Noble and Most Ancient House of Black “Toujours Pur” (高潔で古から続くブラック家の「純粹たれ」)” (V 103) という家訓に忠実な娘であらうとただけである。血縁関係を守るためだけに Lestrange 家に嫁ぎ、純血主義を守るためには殺

戮もいとわれない。その強い意志は、家が発する「純血主義がすべてである」「従わない子どもは愛される資格がない」という強く虐待的なメッセージに素直に答えただけともいえるだろう。家訓に従う「良い娘」としての Bellatrix は、家族に忠実になろうとするほどに残酷にならざるを得ない。敗北の側の Bellatrix やその姉妹もまた、親から「それ以外の道」を許されなかった子どもたちである。

IV 敗者の排除

敗北する Voldemort とデス・イーターズは、なぜ「悪」と記述され、救済の道を絶たれるのか。*Harry Potter* には、犠牲的に子どもを守る正しい愛は、正しい理想と信念の持ち主である肉親からのみもたらされ、そうでないと子どもは歪んでしまい、公共では救済できないという信条があるからである。

自分の命を顧みずに子どもを守るような親子的「愛」は、本来、養子縁組された家族間でも、横暴な親の目の届かないところで他の大人と若者の間に結ばれる信頼関係でも、あるいは孤児院でも見いだされうるはずだ。しかし、*Harry Potter* では、正式に婚姻した血のつながった両親からの惜しみない愛が正義であるという狭い家族観が Harry を勇者にし、Voldemort を破滅させる。生まれや血が決定づけるものからの解放を試みうるかについての広い可能性を吟味してしまうと、生みの親からの深い愛情という資産が価値を落とすと同時に、敗北した「持たざる」者をパブリックな形で救済する必要も出てくる。新自由主義的な「自己責任」において、「愛」が欠落した者は放置される。そしてそれを「悪」と片づけることにより、切り捨てに痛みが感じられないように仕掛けられている。

Harry はhogwartsでの対決の中で一度 Voldemort の呪文を受けて倒れ、
 “like King’s Cross station. Except a lot cleaner, and empty, and there are no trains as far as I can see (キングス・クロス駅のように。ただ、もっときれいで誰もいなくて見渡す限り電車もない)” (VII 570) と

いう不思議な場所で、死んだ Dumbledore に再会する。そして、赤ん坊のときに攻撃されたときに意図せざるホークラックスになっていた自分が、一度死んだことにより Voldemort とのつながりから解放され、改めて復活して敵を倒せることを知る。

この邂逅の場所で、2人は Voldemort の真の姿である、時間の流れに逆らった異形の赤ん坊を見る。

It had the form of a small, naked child, curled on the ground, its skin raw and rough, flayed-looking, and it lay shuddering under a seat where it had been left, unwanted, stuffed out of sight, struggling for breath. He [Harry] was afraid of it. Small and fragile and wounded though it was, he did not want to approach it.

それは、小さく裸の子どもの姿をして、地面に丸まり、肌は生々しく傷ついていて皮を剥かれたみたいだった。置き去りにされ、望まれず、目の届かないところに捨てられたゴミみたいに一生懸命息をしながら椅子の下で震えながら横たわっていた。ハリーはそれが怖かった。小さくてもろくて怪我をしていたけれども、近づきたくなかった。

(VII 566)

以前の英国魔法省内の戦いで、デス・イーターズの一人が同様の“(a) baby’s head now sat grotesquely on top of the thick, muscled neck of the Death Eater as he struggled to get up again (デス・イーターズの1人が立ち上がろうとしつつも、今や、そのがっしりした筋肉質の首の上に赤ん坊の頭が奇怪に乗っている)”(V 697)状態になったのを Harry は目撃している。Hermione の “You can’t hurt a baby! (赤ちゃんを傷つけちゃいけないわ!)” (V 697) という叫びでとどめを刺すのを思いとどまるが、その声がなければ殺していただろう。その男と同様に生と死のはざまで見捨てられた異形の赤ん坊を、Harry も Dumbledore も見下

ろしたままである。生の世界で魂を削り落とし、多くの死と痛みが刻印されている Voldemort は、どれほど弱々しく傷ついていたとしてもそこに留め置かれる。哀れに怯える赤ん坊はあたたかく抱き上げられることはない。

親から虐待を受けて育ったとしても、どのような洗脳教育を受けたとしても、本来、親と子は切り離された人格であり、子どもは生まれ落ちた環境に完全に左右されることなく、(困難ではあっても) 自立してものを考え、時には親が用意した環境を否定し、飛び出し、与えてもらえなかったものを自力で獲得しにいく主体的行動力とその権利があるはずである。だが、*Harry Potter* の思想では、闇の魔法という転覆的な技術をめぐる内戦において、中途半端な知識による階級上昇をめざして「愛」の価値を暴落させようとした側は完全に敗北しなければならない。彼らが許され、幸せになり、新たに愛を得る可能性や政治による救済の機会を得てしまうと、Harry を頂点とするメリトクラシーは崩壊するからである。

Voldemort の誕生は、彼が愛を知らない子どもとして生まれたという理由で説明され、イレギュラーな暴走と見なされる。彼が道はずれていくのは、ただただ彼の両親の関係が破綻していた上に、血筋が呪われているからである。Gaunt 家の血にあやつられた Voldemort が “obvious instincts for cruelty, secrecy and domination (残酷さと秘密主義と支配への明らかな本能)” (VI 259) を持つ異端児として記述される限り、Harry を超越的な英雄にした特権階級的な「愛」のありかたは盤石である。

おわりに

本論では、*Harry Potter* における「悪」の像がいかにかに旧来的な家族観に根ざし、固定的に描かれているかを考察してきた。良い魔法使いと闇の魔法使いを政治的に分断するのは闇の魔法をめぐる意見の相違だが、登場人物がどちらに分かたれるかは、肉親家族を中心にした愛という生まれながらの要素に左右される。Voldemort やその崇拜集団がなぜ生まれたかという問いは、彼らの邪悪さを愛のない家庭に起因させることで清算されるの

で、勝利者側の自己批評はない。

Harry Potter は Harry に最大限のアドバンテージを与える。反面で、セーフティネットにも引っかけからず、闇の魔法という技に接近することで階層脱出を試みた Voldemort は、生まれたときから「愛」を持たないゆえに敗北し、「悪」として記述される。デス・イーターズのメンバーが抱えた闇も、肉親からの歪んだメッセージや不均衡な夫婦関係に収斂され、彼らが個人としていかにそのような環境から抜け出せたかは思考されない。極端な純血主義や Voldemort 礼賛の思想に傾倒しないための方策が政治的に論じられることもない。Voldemort は倒されるが、いずれまた同じように闇の魔法に魅入られ、現在の制度を転覆しようとする魔法使いが出てくる可能性すら残す。

ファンタジーが現実と接続するという点で、勸善懲惡に落とし込まれたこの物語は、Voldemort を悪として記述する権力が、分断を促す装置として機能している。そして、Voldemort を生み出した土壤についての考証もないままに、愛と家族をめぐる因習的な制度存続のイデオロギーと価値観を推進し続けているのではないだろうか。

<引用文献>

- Bell, Christopher. “Riddle Me This: The Moral Disengagement of Lord Voldemort.” *Legilimens! Perspectives in Harry Potter Studies*. Christopher. E. Bell, ed. New Castle Upon Tyne: Cambridge Scholars, 2013. pp. 44-63.
- Bransford, Nathan. “Third person omniscient vs. third person limited.” *Nathan Bransford*, 8 Apr. 2019, <https://blog.nathanbransford.com/2012/11/third-person-omniscient-vs-third-person>.
- Brown, Molly. “Harry Potter and the Unsettling Subalterns.” *Magic is Might 2012: Proceedings of the International Conference*, edited by Lulgina Ciolfi and Gráinne O’Brien. Sheffield Hallam University, 2013. pp. 134-144.

- Garner, Barbara Carman. “Rowling, J. K.” *The Oxford Encyclopedia of Children’s Literature Vol.III*, edited by Jack Zipes. Oxford: Oxford UP, 2006. pp. 368–9.
- Ishiguro, Kazuo. *The Remains of the Day*. London: Faber & Faber, 1989.
- McNulty, Mairead. “Reconsidering the Tragic Tale of Voldemort’s Parents.” *Tor.com*, 6 Dec. 2017. <https://www.tor.com/2017/12/06/reconsidering-the-tragic-tale-of-voldemorts-parents/>.
- Rowling, J. K. *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. London: Bloomsbury, 1998.
- . *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury, 2007.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury, 2000.
- . *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. London: Bloomsbury, 2005.
- . *Harry Potter and the Order of Phoenix*. London: Bloomsbury, 2003.
- . *Harry Potter and the Philosopher’s Stone*. 1997. London: Bloomsbury, 2014.
- . *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. London: Bloomsbury, 1999.
- Russell, David. *Literature for Children: A Short Introduction*. 8th ed., Pearson, 2015.
- Sue TLC. “New Interview with J. K. Rowling for release of Dutch edition of “Deathly Hallows.”” *The Leaky-Cauldron.org*. 19 Nov. 2007. <http://www.the-leaky-cauldron.org/2007/11/19/new-interview-with-j-k-rowling-for-release-of-dutch-edition-of-deathly-hallows/>.
- 安藤聡 『『ハリー・ポッター』シリーズに見る英国ファンタジーの伝統』『大妻比較文化』第13号、2012、pp. 127–115。
- 大貫隆史、河野真太郎、川端康雄編著 『文化と社会を読む批評キーワード辞典』研究社、2013年。
- 河野真太郎 『『ハリー・ポッター』は「ルールなき闘争の時代」の教養小説である - イギリス階級と成長物語の150年』『現代ビジネス』2019年

2月15日。<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/59860>.

スピヴァク、G. C 『サルバタンは語るができるか』上村忠男訳、みすず書房、1998年。

曾村充利「愚かさの自覚と自由な生-カズオ・イシグロ『日の名残り』」『新自由主義は文学を変えたか』法政大学比較経済研究所、曾村充利編、法政大学出版局、2008年、pp. 213-241。

野家啓一『物語の哲学』岩波書店、2005年。